

## 先史時代における『日本海文化』成立にかかわる石器石材環境の基礎的研究

中村 由克

## 1. はじめに

日本海沿岸を中心とした文化圏が誕生したのは旧石器時代である。後期旧石器時代の約2万年前ごろ以降、日本列島各地に地域性が芽生え、北陸地方を中心とした日本海沿岸地域に独自の石器文化が発達したことが知られている。福井県から長野・新潟県にひろがる「瀬戸内系石器群」、長野・新潟県から山形県にひろがる「杉久保系石器群」、石川県から青森県にひろがる「東山系石器群」などがその代表例である。

これらの石器文化（石器群）は、それぞれ石器の形態・製作技法が違うだけでなく、特定の石材を主要な材料として選択していることが特徴である。したがって、石器の石材に着目して、その種類の鑑定、原産地の特定をおこなうことによって、当時の人類の移動経路が解明でき、また、地域文化成立の要因解明に向けた基礎資料が得られることが期待される。

北陸～東北地方に産出する頁岩を用いた杉久保系、東山系などの石刃石器群は、柳の葉のようにすらりと細長い石刃をもとに石器を作り、瀬戸内系石器群は黒色で緻密な安山岩を用いて刺身を切るように割った横長の剥片をもとに石器を作る技術を基盤としている。

そこで、本研究では日本海沿岸地域にみられたこれら初期の「日本海文化」とも考えられる石器文化を対象として、それぞれの石器石材の原産地推定と移動の実態を解明することで、「日本海文化」の成立過程を考えるための基礎資料を得ることを目的とする。

20年度の研究では、富山県内の石器に多く見られる緻密な安山岩（無斑晶質安山岩）の原産地調査と遺跡の石器石材の鑑定を実施した。

## 2. 従来の研究

富山県内の遺跡でよく使用される石器石材は、立野ヶ原系石器群が碧玉（鉄石英）・玉髓（メノウ）、瀬戸内系石器群が安山岩・下呂石、石刃系石器群（東山系・茂呂系など）が頁岩または濃飛流紋岩、そして尖頭器石器群が黒曜石・安山岩などとされてきた（麻柄 1987 ほか）。これらの内、碧玉と玉髓は南砺市周辺に原産地が知られていたほかは、富山県内で石材原産地の存在は明確には知られていなかった。

## 3. 研究方法

野外調査では、地質文献をもとに地質分布の予測を立てた上で、石器石材となりうる原岩の分布、採集可能地の検討をするための地質調査を河川流域に沿って実施した。各地点の石材サンプルを採集して、石材データベースを作成した。

室内研究では、石器の石材鑑定を実施し、石材サンプルとの比較をおこなった。石器石材の観察記載は、非破壊の方法により、実体双眼顕微鏡、金属顕微鏡などを使用した。岩石鑑定にあたっては、色調（土色帖）、組織・構成粒子（ルーペ・顕微鏡）、磁性（磁石）などの属性を測定・調査した。

## 4. 富山県内における無斑晶質安山岩の原産地の確認 図1、図2、図3

富山県内で安山岩を主とする地層は、新第三紀の岩稲累層である。岩稲累層は、富山市細入の岩稲を模式地とし、富山県東部から石川県中央部の山地に広く分布し、主に安山岩質の溶岩や火砕岩類からなる。高橋・周藤（1999）は模式地周辺の岩石学的研究をしている。その中に黒川支流の小佐波川上流に無斑晶質安山岩（Aphyric andesite）を記載している。

この記載を参考に、岩稲累層の分布域を流下する河川を踏査したところ、富山県下の岩稲累層の分布域には、ほぼ全県的に無斑晶質安山岩の存在が確認できた。安山岩の中では、鉱物の粒子が数ミリ程度以上の大きさのものから構成される「顕晶質の安山岩」が一般的であり、量的にも圧倒的に多いが、中には肉眼的には粒子がほとんど確認することができない緻密な「無斑晶質安山岩」が少ないながらも含まれている。

中でも、井田川支流の野積川、山田川、小矢部川支流の山田川、打尾川などでは、無斑晶質安

山岩が全礫中の2~5%ほどあり、比較的質のいいものがみられた。

また、県東部には、岩稲累層より上位の黒瀬谷累層相当層（福平層）に安山岩溶岩、火砕岩が卓越し、比較的、無斑晶質安山岩が多くみられた。白岩川、同支流の虫谷川、上市川、角川、布施川などでは、無斑晶質安山岩が全礫中の10~30%ほどあり、比較的質のいいものがみられた。

富山県下で確認された無斑晶質安山岩は、長野-新潟県境の関田山地、長野-群馬県境の八風山、群馬県の武尊山などのものほど、均質でガラス光沢があるものはみられないが、わずかに輝石類や斜長石の微斑晶を含むものの、石器石材としては十分な品質の岩質であった。

#### 5. 旧石器時代の無斑晶質安山岩製の石器 図4、図5

富山県埋蔵文化財センターのご協力をいただき、センター所蔵の旧石器資料の石材鑑定を実施した。眼目新丸山（上市町）、直坂Ⅱ（富山市大沢野）、石山Ⅰ（富山市婦中）、新造池A・草山B（射水市小杉）、安養寺（小矢部市）、人母シモヤマ・七曲（南砺市福光）、南原C（南砺市城端）などの遺跡には、安山岩製の石器群が出土しており、それら石器を顕微鏡観察して、石材鑑定した。

その結果、石山Ⅰの石器1は井田川高田に、安養寺（AN2）と南原Cの黒色緻密なタイプは山田川塔尾に、安養寺（AN3）と人母シモヤマ4は打尾川白中ダム下に、それぞれ色調、磁性、組織などの特徴から石材が近いことが判明した。これら以外では、近い岩質でないものの、岩質の類似から富山県内の安山岩と考えられ、サヌカイトや他県の産地の石材が持ち込まれたと断定できる資料は見当たらなかった。

#### 6. 富山県域で使用される石器石材に関する新知見と課題 図5

富山県内には断片的ながら横剥ぎを特徴とする瀬戸内系石器群（麻柄 1984）が多く知られているが、今回の安山岩産地の発見と石器の岩石鑑定から、これらはすべて富山県内の石材を材料としていて、長野県の野尻湖遺跡群や福井県の西下向遺跡などと同様に、安山岩原産地の近隣地域に発達した石器群であることが判明した。

もう1点、今年度の研究では旧石器時代の石器石材についての重要な知見がえられた。従来、富山県の石器の多くが「濃飛流紋岩」という名称で記載、説明されてきた。これらは1970~1980年代以降に使用され始めて、富山県内の報告書や出版物だけでなく、日本全国の石器石材の分布図でも富山県域のみ独自の「濃飛流紋岩」の地域と評価されていた。今回は、直坂Ⅰ遺跡の石器を鑑定しただけであるが、濃飛とされていたものは流紋岩ではなく、2種類の異なった岩石であることが判明した。1つは中部~東北地方に一般的な細粒の珪質頁岩であり、新潟県産の珪質頁岩に外見が似たものである。もう1種類は、直坂Ⅰの接合資料などの石材で、石英の結晶を多く含む灰褐色で流紋岩質の凝灰岩である。後者は素材礫が数十cmの円礫で、遺跡内で剥片剥離が盛んにおこなわれ、廃棄されたものも多いという石材使用状況からみて、遺跡に比較的近いところで入手されたものであると推定できる。濃飛流紋岩の一般的岩相とは異なっており、白亜紀の手取層群、古第三紀の太美山層群、新第三紀の楡原累層、医王山累層などの地層に含まれるものである可能性が考えられる。

富山県内の多くの石器が「濃飛流紋岩」ではないことは、すでに考古学サイドから三浦知徳（2005）、麻柄一志（2006）らが指摘しているとおりで、地質学側での石材鑑定の問題であったと思われる。石器の石材鑑定は、非破壊で風化面のみで判断されることが多く、また、地質研究者が1人で各地の石器をみて判断している例は少なく、多くの場合はその場で判定を求められて答えただけという、その場限りの十分吟味されていない「判断」が、「地質学」からの見解として、その後も通用し続けていたことから生じた問題点だと考えられる。

#### 7. おわりに

本研究に当たっては、麻柄一志、越前慶祐、赤羽久忠、田中豊、古川知明の各氏と富山県埋蔵文化財センターにはご教示、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

（本内容については、近く発表予定の論文を参考にされたい。）

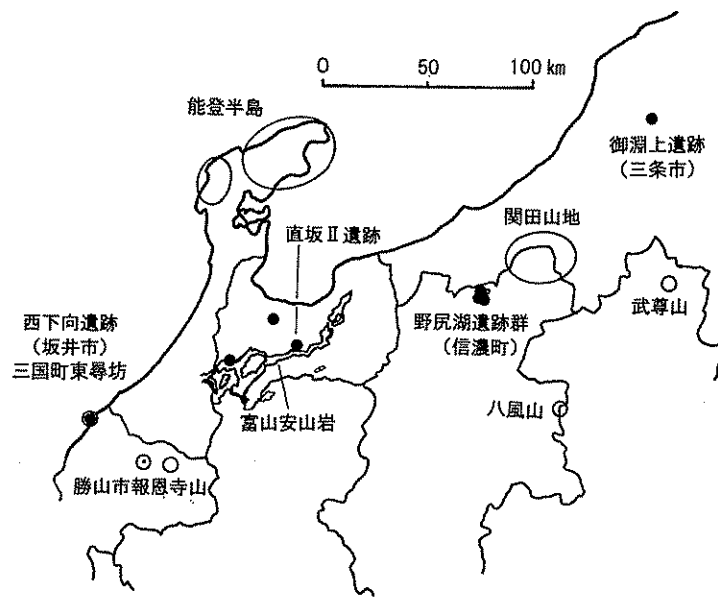


図1 中部地方北部の安山岩産地と瀬戸内系石器群の遺跡

時代	地層	安山岩質岩	年代 (百万年前)	
鮮新世	八尾層群	音川累層	5	
後期中新世		東別所累層		
中期中新世		黒瀬谷累層	安山岩溶岩・火砕岩(県東部)	10
		医王山累層		15
前期中新世		岩稻累層	安山岩溶岩・火砕岩	
		古第三紀	楡原累層	

図2 富山地域の安山岩質岩の層序的位置

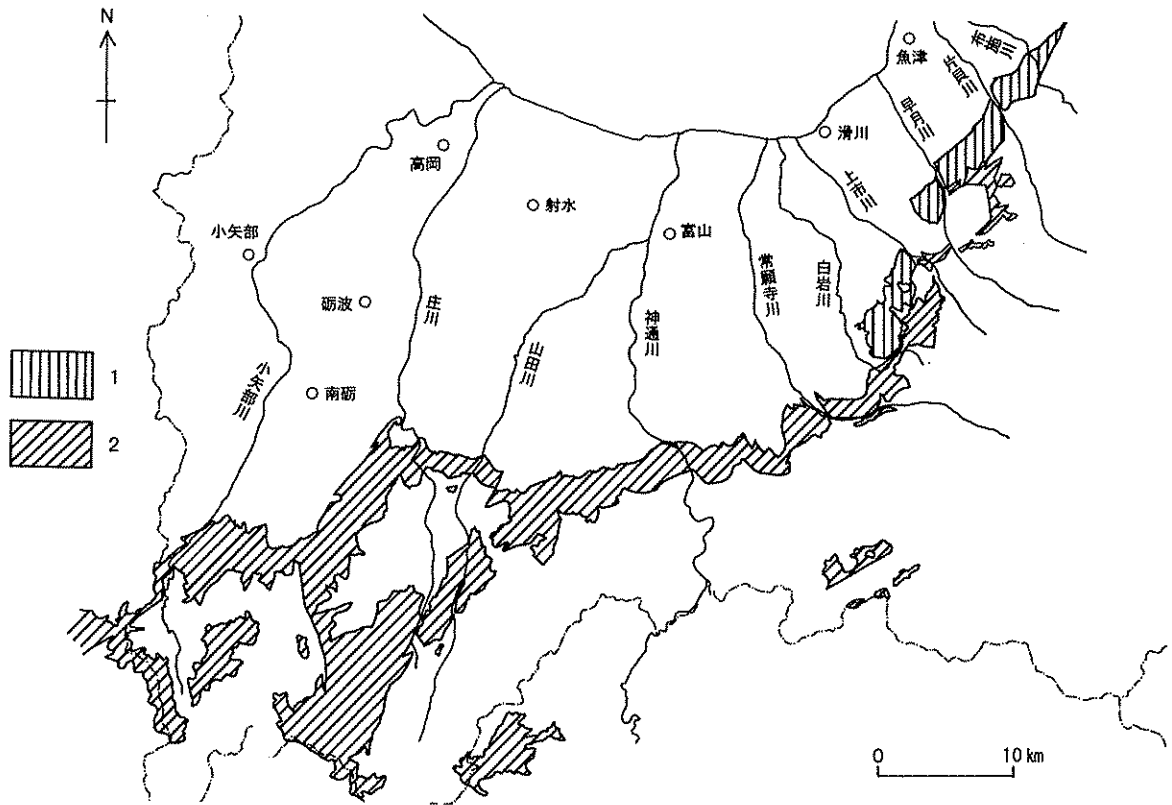


図3 富山県における安山岩の分布図

1：黒瀬谷累層（安山岩溶岩・火砕岩） 2：岩稻累層

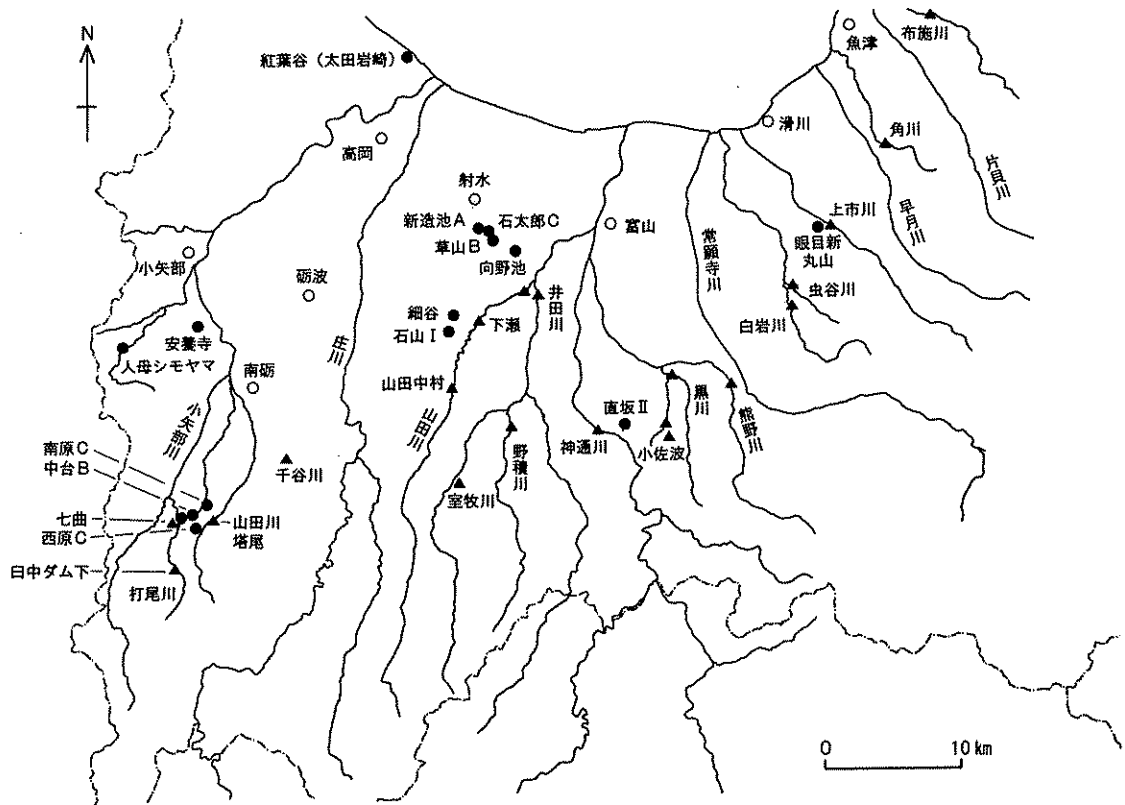


図4 富山県における無斑晶質安山岩の確認地点と安山岩を主体とする石器群



顕微鏡写真

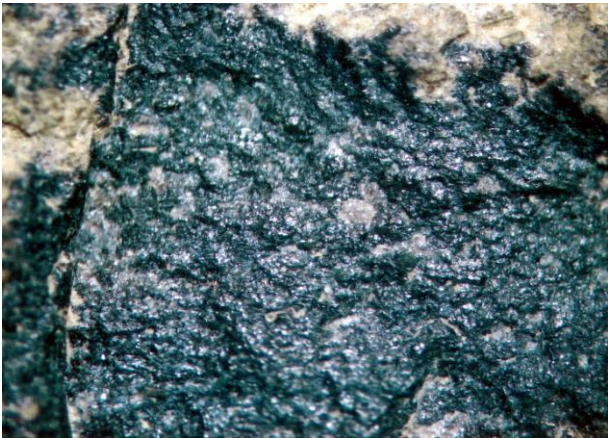
[無斑晶質安山岩]



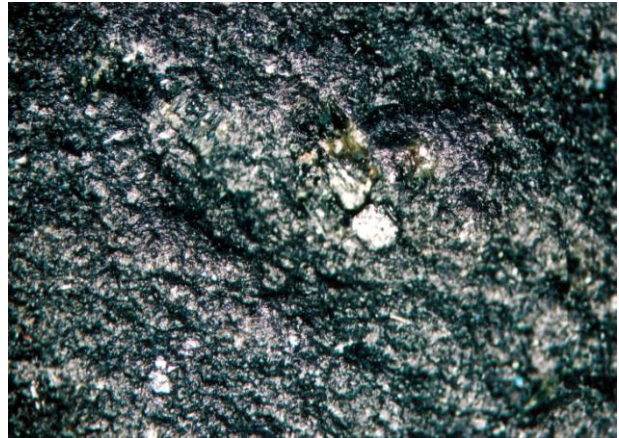
南原C遺跡 X20Y14 剥片



山田川塔尾1 (南砺市)  
斜長石の結晶が含まれる

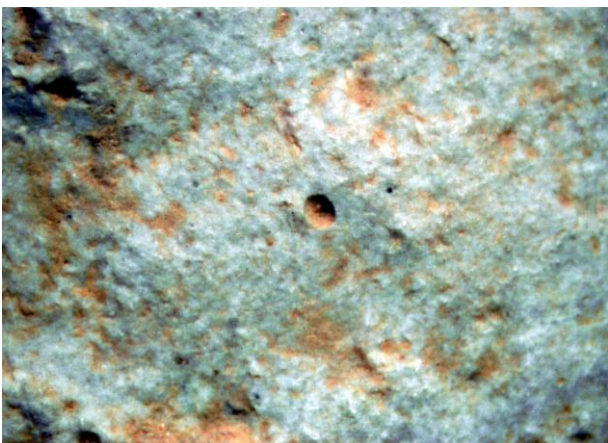


安養寺遺跡 AN3



打尾川白中ダム下1 (南砺市)  
1 mmの輝石を含む

[濃飛流紋岩とされていた石器]



直坂 I 遺跡 石刃 TA-A3024  
珪質頁岩 (珪質凝灰質頁岩)  
中央に微化石 (有孔虫か放散虫) がみられる



直坂 I 遺跡 ナイフ形石器 図 7-5  
凝灰岩  
石英の結晶が多く含まれる

0 1mm

図 5 旧石器時代の石器と原産地石材の顕微鏡写真 (実体双眼顕微鏡×40)